

主体としての子どもの思いを受け止め、心を育てる保育とは ——エピソード記述を通して考える——

鯨岡 峻 京都大学名誉教授

私が考える人間観は、人間の心には矛盾が孕まれていることと、その心には正と負の二面があるというものです。この考えの根底には、「人間は誕生から死に至るまで、自己充実欲求と繋合希求欲求という二つの根源的な欲求を抱えて生きている」という考えがあります。

子どもは皆、自分の興味や関心や欲求を追い求めようとします。これを「自己充実欲求」に根差した心の動きと呼び、他方で誰かと気持ちをつないで安心感や満足感を得たいという思いを、人間の「繋合希求欲求」に根差した心の動きと呼んできました。この二つの根源的な欲求が内部で動き、様々な正と負の心の動きが生まれてきます。しかも、それは「私」という人間の内面の「私は私」「私は私たち」の心の二面に分かれるので、一人の人間の心は、二面・二重になっていると言えます。

人間が皆、二面・二重の心を持つという人間観は、そのまま主体は二面・二重の心を持つという主体観に結びつきます。これまで、主体という概念は、積極的・能動的な面を指す概念として用いられてきましたが、消極的・否定的な面も併せ持つ存在と見なければ、人間を丸ごと包含する概念になりません。人と人が関わり合う、相互主体的な関わり合いの中では、それぞれが根源的な欲求を持ち、その充足を図って生きようとしているのです。子どもと保育者の関係も例外ではありません。

子どもの心が正負両面にわたって動くとき、保育者は優しく受け止める「養護の働き」と、教えたり、場合によっては叱ったりする「教育の働き」をするでしょう。「養護の働き」は、子どもの大人への信頼感の出处であり、自己肯定感の源になります。「受け止める」は、この「養護の働き」全体を示す意味に理解できます。けれど「養護の働き」だけで子どもは成長しません。教え導く「教育の働き」も必要です。

この二つの働きは、バランスを取ることが必要で、保育者は常に子どもの思いを汲みとり、それに応じたコミュニケーション的関わりをする中で紡がれます。そして、その関わりの中で得る無数の心的経験の積み重ねの中で「自己態勢」が形作られていきます。子どもは、幼い時から重要他者と関わり合う中で、正負の様々な心的経験を積み重ね、その経験を纏め上げて、信頼感や不信感、自己肯定感や自己否定感、自信などの心や、重要他者イメージや自己イメージを形作るようになって考えられます。その経験が纏め上げられていく際に、重要他者から「認められるか・認められないか」という評価の結果の「映し返し」が「自己態勢」に組み込まれると考えると、重要なポイントとなることがわかります。重要他者自身がこれまでどのように生活を重ね、「自分イメージ」をつくってきたかも、その子への「映し返し」に大きな意味を持ってくるでしょう。

ただし、子どもとのあいだに信頼関係がしっかり築かれていれば、負の「映し返し」も、そのまま負の意味を持たなくなるでしょう。本日の「映し返し」の議論を踏まえ、二つのエピソードを取り上げてみました。これらのエピソードには日々の保育の営みが凝縮されているのがわかります。